

平成27年度
第1回 徳島県いじめ問題等対策審議会 議事録

○ 日 時 平成27年6月2日(火) 10時から正午
○ 場 所 県庁 10階 特別大会議室
○ 出席者 10名(5名欠席)
○ 会議概要

- 1 開会
- 2 (1)教育委員会あいさつ
(2)会長あいさつ
- 3 協議
(1)いじめ問題等対策検討部会から報告
(2)いじめ問題事例研究
- 4 閉会

【事務局】

本日の徳島県いじめ問題等対策審議会の審議内容について説明

【部会長】

平成26年度 第2回いじめ問題等対策検討部会の報告

平成27年度 第1回いじめ問題等対策検討部会の報告

【事務局】

いじめ問題等対策検討部会で作成している資料について説明

(協 議)

【会長】

いじめ問題の事例研究ということで某高校バレー部のA男のケースを扱う。読んでいただいた上で学校はA男や加害生徒にどう対応すべきだったのかについての御意見、あるいはそれに対して今後どうすべきなのかということについて協議したいと思う。事前に配られた資料に1, 2分ほど目を通していただきたい。

(委員資料黙読)

【会長】

このケースでは、平成25年のいじめ防止対策推進法を受けて、子どもからのいじめ事案という訴えに対し、両親が県に調査を求めてきたというものだ。委員の皆さんとしては学校側への指導も併せて意見をいただきたい。それでは設問1「学校はA男、加害生徒に対してどのような対応をすべきだったか」について私見で結構なので御意見をお願いしたい。

【委員】

ケースメソッドということで、架空の話ゆえに粗雑な対応をしているのかもしれない。しかし、このようなケースはよく起こり得るものだと思う。バレー部で総体を控え、練習に熱が入ってくる中で起こった事例である。いじめられる側のA男と、いじめる側の他の部員という構図になっている。最初、他の部員たちはA男をいじめてやろうとした行為ではない。A男も最初はいじめられているという認識はなく、自分ももっと頑張らなくてはいけないという認識でいた。そこから始まっている。(最初の2段落目によく表れている)次第にA男に対する風当たりが強くなる。それは他の部員たちは総体に向けて勝ちたいという思いが強くなるあまりに、チームの足をともすれば引っ張っているように見えるA男に対して苛立ちが募ってくる。例えば部活終了後に居残り練習が行われるようになった。ボールをぶつけられる日々が続いたとか、技術面以外にも言葉としてA男に対して厳しい言葉を投げつけるようになっていく。最後には身体的特徴を中傷する者まで現れた。これらから、A男に対する行為が次第にエスカレートしていることがわかる。しかし、それに対してA男は自分が技量的に劣るからというひけ目もあって、なかなか言い返すことも出来ない。自分も足手まといになっていることがわかるから、友だちからの叱咤激励と解釈して耐え続けたということで、本人からの訴え(自訴)がなかなかなかった。それが見過ごされていく中で、次第にエスカレートしていった。その見過ごされていく一つの理由には、バレー部の顧問教師が、日に一度は練習に顔を出すものの深い関わりというか、見抜くとか気づくということができなかった。顧問も、総体が近づいているから互いに励まし合って練習しているんだという、善意の解釈をずっとしてきた。そのあたりが見過ごしのポイントだったので、A男の中で積み重なって、ある時A男の体に拒否反応が表れるし、その後、長期間の欠席に陥った。学校が初めて知るのは、長期の欠席になったところである。担任の先生が家庭訪問をして、A男から初めて聞かされ、この1ヶ月くらいの間のことがわかっていくという構図である。

いじめ問題は、さまざまな形として表れるが、例えば暴力で顔にあざができるようなこと以

前に、もっと小さな芽がいろいろある。その小さな芽を早く見つけることが、あるいは気づくことがその後の解決に大きな意味がある。早く小さな芽で見つければ早く解決する。根も深くならず、心の傷も深くならず解決できればいいが、それを見過ごしていき、心の傷が深くなり、ついに拒否反応を示すような体調になり不登校になってしまった。両親が学校に対して調査してほしいという気持ちはよくわかる。それを見過ごしてきた側の責任は問われる。

県もいじめの調査を毎年している。その中に認知件数というものがある。これは調べるたびに次第に減っていった、全国的に大きな事件や事案が発生するとまたぐっと増える。そのぐっと増えるというのがまさにしっかりと気づいたから増えたということである。だからいじめが減っているのかということと実は減ってない。人間が生きていく中でいじめは必ずあるという前提に立って物事を見ていかないとはいけない。

この事例を見て前段の大人たちの気づきが遅かった。このためA男の心の傷が深くなってしまった。子どもを預かっている立場としては大いに反省し、肝に銘じなければいけない部分と思った。

【委員】

誰もA男に寄り添えなかったんだなと思った。体がガタガタ震え呼吸が苦しくなるまで彼に寄り添うことが出来なかった。それでいじめはなかったと言えるのか。彼はずいぶん耐えてきた。前に委員さんが言ったようにいろんなところで発信があったと思うし、このバレー部の中の雰囲気は決して良くなかったと思う。一つのものに向けてみんなが頑張ろうという雰囲気ではなくて、本当は頑張りたいんだが、顧問も来てくれなくて、そのイライラのはけ口があちこちに出ていたのではという感じがする。

教員をしてきて思うのは、男の子は辛いことやしんどいことが言えないことが多い。男は強くなくてはいけない。泣いたらいいかん。愚痴を言ったらいいかんと思っているように感じる。女の子はいろいろな生き方が出来るように思う。強く生きることできるが、友だちや保護者に悩みを相談したり、辛いことを打ち明けたりしやすいように思う。いろんな生き方があるのだが、男の子の場合は親にも言えない。友達にも言えない。先生にも言えない。そういうところが育ちの中であるかなと思う。それで我慢して、我慢して、我慢してポキッと折れてしまう。そういったところを私たちは知っていなくてはいけないと思う。男の子であろうと女の子であろうと誰であろうと「しんどいときやつらいときは SOS を出していいんだよ」と常に私たち教員は発信していくべきだと私は思っている。そういったことが常に発信されていれば、A男は誰かに言えたのではと思う。

いじめの法律が出来てから、それぞれの学校は定期的にいじめのアンケートをしているはずだ。そのアンケートをしたら良いというのではなくて私たちが本当に困っている、本当に辛がっている、心の痛みを感じている子どもたちを救うんだという気持ちできっちりアンケートをとらないと形骸化するだけだと思う。しかしそのアンケートの中にも周りからも本人からも何も出てこなかった。もし私がこの学校の校長だとすれば非常に申し訳ないと感じるし、県に調査を求められたというときもしっかりと寄り添って本当に申し訳ないという気持ちがあれば、こじれることなく、この子のことをどうするかということでも話し合えば、甘い考えかもしれないが、案外解決するのではないかなと思う。

【委員】

このケースを考えてみて、学校調査委員の方は事実関係の把握をしたのに、調査結果の「いじめだけが要因とは考えられない」といった言葉が、A男や両親を傷つけたように感じた。きちんと調査ができていないのではと感じさせられた。「いじめも一つの要因である」とははっきり認めて欲しかった。A男には他にいろいろな悩みがあったかもしれないが、いじめの事実があったし、いじめられたことがきっかけで不登校になったかもしれないので、いじめが大きな要因では…と考えてあげるべきだったと思った。A男にとっても言葉でいじめがあり、肉体的にもいじめがあり、その上に傷つけていると感じた。

いつも思うことだが、学校にいじめがあったことを認めたくないという気持ちもわかる。見過ごしていたことがばれてしまうという気持ちもわかるが、A男にとっては本来なら助けてくれるはずの学校が、今この時点で背を向けてしまったととられるし、A男も両親も誰に助けを求めていけばいいかわからなくて、絶望して、反感しか持たないようになってしまう。物事が起こったときは、当事者や保護者は不安の中にいる。こんな時だからこそ、言い方ひとつ、説明の仕方ひとつに気をつけてもらいたいと思った。保護者の協力なしには進められないことである。長期欠席した後に担任教師が自宅に訪れたのであれば遅すぎると思う。早いうちにA男に会って登校できなくなった理由がわかった時点でバレー部員に話を聞く。双方への対応、いじめられた側には心のフォロー。いじめた側にはA男の気持ちやつらさを伝えること。いじめは絶対だめという認識を持たせられたなら違った結果になった気もする。気づいた時点ですぐに保護者に対応することが一番大事である。A男は今までも学業や進路について担任に相談している。また友人関係で悩んでいたとアンケートでわかったのであれば、友人関係のことは友だちに相談していたのではなかったのか、担任とは相談できる関係を結んでいたのではなかった。不登校になるまで悩んでいたのに、担任や周りの友だちにも相談が出来なかった。い

つもとたぶん違う様子だったのに声かけもしてあげられず、気づいてなかったのかと思った。バレー部のいじめをしていない部員もいるはずなのにどうして顧問に伝えなかったのかと思う。周りをもっと早く気づいてあげられなかったのかと思った。

結局は周りの人が気づくということと、話を聞くことができる人間関係ができていなかったんだと思う。その生徒が実際にどれだけ悩んでいるか気づいてあげられるか、話ができるかにかかっていると思う。相談を受ける側も話がしやすい雰囲気作りや多くの想定やいろいろな問題を見つけて、いろんな対処の仕方を伝えていくことが大切だと思いますし、「いつも味方だよ」「助けてあげるよ」と発信することが必要だと思う。

相談機関もたくさん増えてきている。私も相談を受けているが、やはり最初の一步が出ない。始める前から「相談しても無駄と思っていた」といった感じで、今でも尻込みしている人もたくさんいる。しかし試してみたら気楽に相談できたと答えてくれることが多く、解決がその場で出来なかったら次へと後押ししてあげられるようにすることが大事と毎回考えている。

先ほどの委員さんも言っていたが、子どもの頃から困ったことがあっても頑張って自分で解決しましょう。困難を一人で乗り越えることが良いという風に教えられてきたような気がする。しかし、どんなに頑張ってもダメなときもあるし、自分一人では乗り越えられないということもあるので、いろんなことを教えるときには周りに助けを求めましょうと付け足して欲しいと思う。相談することは恥ずかしいことじゃないんだと子どもの時から教えて欲しいと思う。A男にもバレー部員の人もこんな状況って間違っていないかと誰かに相談してみようという気持ちになれなかったのか。誰かがこんな気持ちになっていれば発見することも早かったと感じた。

学校によって違うかもしれないが、学期ごとに家庭訪問や三者面談があると思う。家庭訪問といえ、15分ぐらいで短く、先生と詳しい話が出来ない。三者面談は子どもが隣にいたので、子どものことで悩んでいても先生に直接話をするのは難しい、相談しにくいかなと思うので、学校も保護者だけの面談を数多くしてくれたなら保護者も楽になるかと思う。何か問題があったときに自分で電話をかけて学校に電話をして相談するというのは保護者にとっては勇気がある。家庭でのアンケートも子どもが持つていくので詳しくは書けないので保護者の面談を増やしてくれたらありがたいと思う。学校の先生も「あれっ」て思ったときには保護者に相談して欲しい。学校の側から連絡するというのも必要だと思う。

私自身、成年後見人をしている。もっと早く行政や地域の福祉の手が入っていたらと考えられる事案が多い。それも学校の時代から福祉の手が入っていたらという事案である。不登校やいじめを学校だけの問題と捉えずに身近な市町村行政が、支援を必要としている家庭の把握や学校との協力体制をとってもらって、小学校入学以前より行政が関われば、福祉の問題や経済的問題など家庭内の問題にもより早く対応が進むと思う。教育だけではなく、行政にも一緒に入っていただけたらと思う。学校内でこういった難しい問題があれば外部の機関と連携して支援を仰ぐことも必要であるし、地域にも民生委員の方にも登下校の時の子ども同士の様子を見ていたら、あの子ちょっといじめられているんじゃないかと周りが気づきやすい。気づいたら連絡をもらうということも必要だと思う。学校は問題があっても当たり前なので、問題を明らかにすることで動き始めるし、解決に至る道筋にいてと考えていったらいい。次の学校へ問題を手つかずのまま先送りして、問題の根を深くしてしまっているということがある。どんな問題にも早く取り組んでももらいたいと思う。問題の小さなきっかけから裏側に隠れている問題の本質を見つけることができたならそれに付随した問題への対処の仕方が大きく変わってくると感じている。

【委員】

私からは問題点を2点に絞って話したいと思う。1点目は何故このような状況が把握できなかったのか。これは、はっきり言ってバレー部だけの問題でないと思う。他の者も見ているはずだ。絶対その中には良識ある生徒もいるはずだ。その情報発信が教員側で受け止められていない。学校全体の問題として受け止めなければならないと思う。教職員の質もあるでしょうし、また勇気のある生徒は絶対いるはずだ。そういった生徒がどういった信頼のおける先生に相談するのか。また相談したが、そこで潰されてしまったのか。こういった問題もあるのではないかと思う。情報を吸い上げるというのは非常に難しいが、やろうと思えば簡単である。先生と生徒の信頼関係があればと思う。「バレー部のあいつがいじめられている」と生徒同士は知っている。しかし、これを先生に言っても仕方ない。「どうせ相手にしてくれないだろうし…」しかし、心ある生徒であの先生に言ってみようということを端緒に発覚することもある。現場の末端の先生方すべてが意識して物の言える学校にしてもらえたらいいと思う。

2点目は学校問題調査委員会を設置して云々とあるが、被害者を置き去りにしている。まずは被害者である。被害生徒の意見を聞く。情報を把握する。また保護者の意見を聞く。これがあってしかるべきである。しかしこの学校の対応を見ると、学校内だけでアンケートをとって丸め込んでしまおうというこの対応は、隠蔽体質といえる。被害者が一番だと捉えていればこのような調査結果にはならなかったと思う。それと「調査」、「調査」と簡単に言うが、一方的な調査ばかりである。アンケートをとった。相手にも聞いた。だからこういう結果である。こんな調査は調査ではない。こんな調査では犯罪の立証はできない。出てきた情報に疑問を投

げかけ、確認をして、何回も何回も聞き取りを重ねて、それでお互いの主張を把握して、どこに合致点があるか、矛盾があるか、そこをついていかなければならないにもかかわらず、ただアンケートを取って調査委員会で「こうだった。こうだった。だからこうなんだ。いじめもあったけど他の事もある。いじめは一要因でいいんだ。」こういった結果ありきの調査になっているのではないか。学校現場ではこういった形になっている場合が多いと思う。いつもアンケートを取りましたと新聞紙面でも見るが、アンケートを取って、その後どうしたのか。本当に突き合わせをして被害者のほうにも加害者の方にも確認をし、全部突き詰め、保護者も納得した回答が出ているのか。しかし納得できないから保護者が申立てをするんだろうと思う。

これは極端な事例で、現在このようなことはないと思うが、現場と周りすべてが本気になって取り組まなければいけない。これは学校のこと。これは家庭内のこと。などとなすりつけ合いをするのではなく、両方が重きをおくべきでないかと思う。我々もこういった感覚で見ている。関係機関が全て考えて行ふべきだろうと思う。学校だけで結果を出すのは危ないと思う。

【委員】

とても少ない情報で推論、評論するにはためらいを感じるが、印象としてこの子どもが可哀想と思う。大勢の人が心配してくれ、考えてはくれたが、被害者の気持ちになって、被害者の立場になってくれる人はいなかった。簡単に言うとみんなで考えてくれたが、彼の身になってくれる人はいなかった。彼は独りぼっちだった。本当は、先生や委員会ではなく、親が気づいて取捨選択して「生きていく力」をつけてあげないといけないのではないかと思った。嫌であればバレー部を辞めてもいい。いかに生きていくかを見極め、取捨選択し生きていく。それは流されるのではなく、泳いでいくような「生きていく力」をつけてあげられる人が、家族である父親や母親であることが望ましかった。しかし難しい現実もあると思う。両親の次に考えられるのは教師だと思う。先生の指導で立派に生きている人はたくさんいると思う。担任の先生に更なる期待をこめて、生徒らを独りぼっちにしない人、親身になって共に考えてくれる人、生き方を導いてくれる人がいたらこういった事件・事故は少なくなるのではと思う。

【委員】

委員皆さんの意見を聞いて『信頼』と『勇気』が大切だと思っている。私の母親は幼い時、「何かあったら親に言いなさい。」と言っていた。「山より大きい獅子は出ないし、この世で起こったことはこの世で解決がつく。」「大人は生活の知恵があるから何でも打ち明けるように」と育てられた。小学校の時、身体的なことではじめられたり、中学校の時は鉛筆を削るカッターのようなもので背中を切って切ってされたり、いろいろあったけれど、親が子どものことを本当に心配しているという信頼感があれば何でも打ち明けられる。

それと前述の「勇気」が持てるような教育もしていかなければいけないのではと感じた。『言わない』のではなく『言えない』だろうと思うからである。

【委員】

この事例に関して、どこに視点を置くかにより対応は異なると思うが、学校で起きた問題という点において、いち早く組織的に対応することが必要と思われる。一つはA男の安全安心を保障すること。このことは保護者にもきちんと伝え、A男を守り抜くという姿勢を学校全体で取り組む。二つめに、情報を正確に収集するための手段を明確にしておく。例えばアンケートの取り方やSNSの書き込みといったネット関係からの情報収集や保存の仕方。犯人探しではなく、事実を正確にキャッチするための手段を日頃から決めておくことが必要である。

いじめをしてしまった生徒も非常に苦しい立場に立つと思う。どうしてこのような事態に至ったか、その背景を理解することも大切なポイントとなる。

いじめが不登校の直接的な原因なのか、または様々な複合的な問題が絡んでのことか、A男が安心できる場面において、しっかりと傾聴する必要がある。これらの問題解決に向けて学校全体で取り組む姿勢を保護者にも報告することで両者の関係を良好に持ち、A男の学校生活を保障していく。

何よりも、定期的にこのような事例検討会の機会を持ち、常日頃問題解決についての対応を学校全体で考えることが大切だと思う。

【委員】

私が仕事をしている場所では、学校とか大きな組織ではなく、個人的に子どもの話を聞くことが多い。

この資料を見たときに学業成績や進路のことで悩んでおり、ということからいじめだけではないだろうという結果を聞いてA男は納得しないだろうと思った。実際こういったことはあると思うが、個人的にいじめの相談を受けた経験からいじめられた子は自分が悪いのでいじめられて当然というような人間と思っているところがあったりする。そういう心理が働いている時が多い。そのとき私は、いじめられて当然という人間はいないと言うようにしている。

ある高校の女子生徒が、クラスで無視をされた。叩かれるとかであれば周りが気づくが、無視や近づいたときに「うざい」と言われるだけでは、周りからは見えないようないじめ。心理的にいじめられている子からの相談があった。もともとその子は母親からの虐待も受けている子だった。母親からひどい虐待や存在を全否定されるような子で、通告がありカウンセリング

をした。そんな不登校気味の子がやっと高校に行き、クラス内でいじめを受けた。その時に「あなたは独りではない」と伝えた上で、「話をオープンにしてください」と言ったところ、その生徒は「仕返しされるのが怖い」と言っていた。しかし「独りでない」ことを伝え続けた。話をしていく中で、3人の子にいじめられていたのだが、高校ですからいろいろな中学校から来ているわけで、どうもその子たちも中学校でいじめられていたようだった。いじめられていた子が高校になって別の子をいじめるという形になっていた。親から存在を否定されてきた子だから親の守りがなく、いじめる側はこいつは弱いと感じ、的確に責めてきたんだと思った。それゆえあなたの問題ではなく相手側の問題であると伝えた。いじめはいじめる側の問題であることを言い続けている。妬み、自分の不満、腹立たしさを投影するようになっていく。だからどうしていじめが起きたかを訊く。あなたが悪いからとかではなく、相手の醜いところを発散させるためにあなたにぶつけているだけであなたのせいじゃない。一緒に戦うから頑張っているというスタンスで接した。こういう経験を持っている者がこの事案を見るといじめた子にもいじめる原因があるかもしれない。いじめられる本人にも問題があったと言われれば被害者からすれば納得いかないのだろうと思った。

調査やアンケートをするのは方法としてはわかるが、ただアンケートをしたから終わりではなく、どうしてそういうことが起こったか。どういう背景、どういう被害者、加害者の生い立ちや気持ちの流れの中で起きたことを浮き彫りになるようなアンケート結果であれば納得できると思うが、ただ聞き取ったことだけ調査しただけ、数字的なものだけ、言葉の羅列だけでは何もわからない。前述のように言葉の証言を取ったり、ストーリーがわかるような調査結果にまとめられたら理解されるのではと思う。こういったことが盛り込まれる調査をすべきである。形だけの調査ではなく、そこまで踏み込んだ調査であって欲しいと思う。

【委員】

事実把握が遅かったと思う。学校では補習や研修など業務があり、先生方は忙しく部活動をずっと見ていられる状況はないのだが、その中でいじめや事故等もあるので、自分が見られないときには複数の顧問がいるでしょうから副顧問にお願いするとか、体育館であればバレー部だけでなく他の部活動もしているでしょうからその顧問の先生に見守っておいて欲しいという声かけをお願いしておく。教員同士でお互い見ていけるようなことが大切だと思う。

また、バレー部以外の部員も見ていないかもしれないので、そういった生徒らが先生に情報を上げてきてくれる人間関係が大切。保護者の方もこの頃元気がないとか、食事が進まないとか、自分の子どもを見たときに最近様子がおかしいのが何かないかと先生に尋ねる。教員も「何もないです」ではなく、関係する先生方から情報収集をし、その結果を保護者に返すようなことをすればいい。保護者から「様子がおかしい」と上げてきてもらいやすい人間関係が大切だと思う。

こういった事例を校内で職員の研修としてやることも大切なことであり、効果があるのではと思う。それによって教師のスキルとしてこんなところに気をつけなければいけないと先生方一人一人がわかってくれたらいいと思った。

それといじめ事案が起こった時、事実関係をつかむ上で、被害者の子、加害者の子からの聞き取りを複数の先生でするのが効果的だと経験上思っている。事実関係をつき合わせたときに違った点を聞き返し、加害者、被害者双方の保護者にその日のうちに連絡しないといけないと思う。「ここまでわかっていて、学校としては今後こうしていきたい」と伝える。

不登校について複合的要因があると言ってしまうと学校はどこに焦点を当てればいいのかからなくなるので、このケースはバレー部におけるいじめに焦点を当てて取り組んでいくべきである。その後A男が学校に帰ってこられるかはわからないが、帰ってきたときにその後を見守っていく。相談にのってあげる。そういった段取りでいくのがいいと思う。

【室長】

貴重な意見ありがとうございます。今回は知事部局の調査委員会で話し合ったことを教育委員会にフィードバックした形である。学校でこのようなケースが起きたときに、学校はどうしたらいいのかということをすべての学校で研究材料とし、活用していただけたらありがたいと思う。

私も教師という立場なので皆さんからいただいた御意見はよくわかる。顧問のあり方、調査のあり方、それぞれ問題にあったと思う。学校の先生すべてが皆様の意見にあったようなことに気をつけなければならない。学校から距離をおいてこの資料を見たときに、学校の調査手法には無理があると思う。対策連絡協議会にも伝えていきたい。

知事部局の調査委員会にも出席しているが、知事は「いじめはある。いじめを見つけて、早期対応できたなら教師を褒めなければならない」とおっしゃっていた。「いじめはあるんだからそれを見つけてくれ。数が多いことは何ら問題ではないんだ」と。私はそれを聞いてありがたいと感じ、学校の先生方にこのことを伝えなければと感じた。今後、教員研修等で伝えていきたいと思っている。

【課長】

いろいろな御意見を聞かせていただきながら、思う点がたくさんあった。私自身も学ばせて

いただいた。一点私からは視点を変えて人権教育の面から考えると、今、人権教育の中では自分の大切さとともに他の人の大切さを重点的に学習していますし、行動につながる人権教育ということで、問題が発生した時、どう行動したらいいのか。このあたりを未然防止も含めて人権教育やすべての教育活動の中で取り組んでいかなければいけないと思った。特に、もしいじめにあった時、もし差別にあった時、どう行動したらいいのかを教育の中で教えることが少なかった。例えば、差別を受けて命を奪われたという事例は過去にもたくさんあった。学んできた私たちはノウハウを知っている。では、いじめにあった時にどう行動するのか。あなたはあなたのままでいいから、相談にのってくれる人がいる機関があるというメッセージを授業の中、家庭の中で話していければ、このようなことにならないと考える行動につながる。スキルや対応力を身につけることが、今後の教育の中で重要でないかと感じた。

【会長】

知事がこういう問題を会議の中だけでするのではなく、いろいろなところへ広げていって欲しいという思いをもたれている。この感覚は大したものだと思う。事例研究といっても本当の事例となれば個別にしていかなければいけない問題になる。資料も山のような資料になるだろう。しかし、A4たった1枚で皆さんのものの目線は違っていても、こういう事案があった時にそれぞれの意見を共有し合うということは必要だと思う。審議会、調査委員会からの資料として出てきたので、これを学校に伝えて、校長を通じて事例研究をしてみるのもいいと思う。そうなれば、知事部局から出てきた課題が学校まで伝わると思う。

これから実際にいじめ問題があった時に、皆さんのお力を借りなければならないと思っている。徳島県には大きな課題があるということを感じている。それは教育事務所がないという事だ。教育事務所が「ある」「ない」が問題ではなく、教育事務所がないことで県から何かをお願いするときに真ん中でコーディネーションする人がいないわけである。他県では、こういった問題を学校の方に周知する時。学校と教育委員会の間に壁があれば、それをコーディネーションする人が教育事務所にいる。それが指導主事とか社会教育主事とかで、間を取っている。ところが徳島にはそういうものがない。県立学校は県なので大丈夫なのだが、市町村教育委員会を一度通さないといけないという課題があるときに、何か同じテーマで考えていくと今、阿南と美馬にサテライトを設置する事業を動かしている。7月になればQUという子どもの満足度調査の見方を、阿南と美馬と鳴門の3地点を結んで研修会を行う予定である。

安全安心という言葉があるが、安全とは損傷のない状態を保障することであり、物理的な問題である。安心とは主観なので容認するという信頼関係である。保護者に安全安心の意識を与えるにはどうしたらいいのか、が課題であろう。

アンケートの手法は考えなくてはいけないと思う。私も昔、現場にいたので白い紙を配って「見たことがあれば書け」という方法は何度もした。だけどその中に一言、気になる記述や乱暴な書き方をしているとか、気になるものには対応した。アンケート調査がどうあるべきかを事務局も含めて考えていかなければいけないと思う。

幸いにも某高校のA男は、自殺をしてない。場合によってはこういった事案で自殺に至ることもある。この事案で県に調査を求めたというのは、行くところもなかったからだろう。(資料2)にもあるが、この委員の構成ではいかながなものか。アンケート調査はどんなものをしたか。再アンケート調査では聞き取り調査をして欲しい。保護者が何を求めているのか再確認する。それが学校としてできる範囲はどこまでか。できることとできないことを考える。何よりバレー部の問題が非常に大きい問題となるなら顧問の一時停止であったり、場合によっては転換もあり得る。学校もしなくていけないことがたくさんあると思う。

ありがとうございました。今後も皆さんからこういった意見をいただきながら対応したいと考えている。